

『心 さわがせる方』 ヨハネ13:21-30

- 13:21 イエスがこれらのことを言われた後、その心が騒ぎ、おごそかに言われた、「よくよくあなたがたに言うておく。あなたがたのうちのひとりが、わたしを裏切ろうとしている」。
- 13:22 弟子たちはだれのことを言われたのか察しかねて、互に顔を見合わせた。
- 13:23 弟子たちのひとりで、イエスの愛しておられた者が、み胸に近く席についていた。
- 13:24 そこで、シモン・ペテロは彼に合図をして言った、「だれのことをおっしゃったのか、知らせてくれ」。
- 13:25 その弟子はそのままイエスの胸によりかかって、「主よ、だれのことですか」と尋ねると、
- 13:26 イエスは答えられた、「わたしが一きれの食物をひたして与える者が、それである」。そして、一きれの食物をひたしてとり上げ、シモンの子イスカリオテのユダにお与えになった。
- 13:27 この一きれの食物を受けるやいなや、サタンがユダにはいった。そこでイエスは彼に言われた、「しようとしていることを、今すぐするがよい」。
- 13:28 席を共にしていた者のうち、なぜユダにこう言われたのか、わかっていた者はひとりもなかった。
- 13:29 ある人々は、ユダが金入れをあずかっていたので、イエスが彼に、「祭のために必要なものを買え」と言われたか、あるいは、貧しい者に何か施させようと思われたのだと思っていた。
- 13:30 ユダは一きれの食物を受けると、すぐに出て行った。時は夜であった。

●序論

聖歌433「弟子となしたまえ」という曲。

最初わたしはこの曲を賛美したとき、恐ろしさを感じたことを覚えています。

4. 「ユダにはなるまじ、わが主よ、わが主よ！」という歌詞です。

そんなあるとき、その印象をガラッと変えられるきっかけがありました。

それは、2015年の 関西聖会で、講師が、冒頭にこの曲を流して、「わたしこの賛美大好きなんです！！」と紹介して下さったからでした。それは英語の歌詞でした。

Load, I want be a christian in my heart. in my heart.

Load, I want be a christian in my heart. in my heart.

In my heart In my heart.

Load, I want be a christian in my heart. in my heart.

「主よ、わたしは、心からクリスチャンになりたい！ 本物のクリスチャンになりたい！」という歌詞。 わたしは、「アーメン！」と叫びました。

それで、振り返ってもう一度、日本語の聖歌を見てみると、同じだったのです。

じゃあ、今まで私を、この賛美を敬遠させてきた印象は何か…というと、お気づきのように「ユダにはなるまじ」この一節のみの印象が私を支配していたからです。そこに、「闇」を感じ、恐れを感じていたのです。「闇」というものに目を向けやすい性質を、少なからず持っていないでしょうか。

今日結論として皆さんに申し上げたいこと。それはこの歌詞にある如く、心から、ユダではなく、「キリスト者、クリスチャンになりたい」と告白することです。ユダに関心を持つのではなく、キリストの心に生きたい、そう告白することなのです。

●本論

I. ユダのために心を騒がされたイエスさま

13:21 イエスがこれらのことを言われた後、その心が騒ぎ、おごそかに言われた、「よくよくあなたがたに言うておく。あなたがたのうちのひとりが、わたしを裏切ろうとしている」。

人は、「裏切られる」ことでひどく傷つきます。またその傷は失望に、怒りに、そして憎しみに結びつくことさえ多いものです。

恋人や伴侶に、また仕事相手や仲間に裏切られる。それは、信賴していた相手が、意思をもってその信賴に背を向けることから起こるからでしょう。

では、イエスさまはユダの裏切りにどれほど心動かされていたのでしょうか。

13:21 イエスがこれらのことを言われた後、その心が騒ぎ、おごそかに言われた、「よくよくあなたがたに言うておく。あなたがたのうちのひとりが、わたしを裏切ろうとしている」。

新改訳では「霊の激動を感じ」という風に、強い悲しみを表現しています。

イエスさまはこのユダの、意図的な裏切りを以前からよく知っておられました。

13:11 イエスは自分を裏切る者を知っておられた。

知っておられてもなお、心がさわがせておられる。

イエスさまは、まだユダをあきらめていなかったのです。そのまま見捨てることができなかつた…からなのです。

イエスさまは、このユダの前にもひざまづいて足を洗い、その愛を表され巻いた。まさしく、「…自分の者たちを愛して、彼らを最後まで愛し通された。(：1)」とある通りです。

イエスさまの心は、このユダへの憐れみと愛で、さわいでいたのです。

II. 悔い改めの機会を与えられたイエスさま

:21 …「よくよくあなたがたに言うておく。あなたがたのうちのひとりが、わたしを裏切ろうとしている」。

「アーメン、アーメン」、大切なことだからと前置きして、弟子たちに伝えたことは、この中にご自分を裏切る者がいるということでした。

当然、弟子たちの間に戸惑いが広がります。「それは誰だろう？」という風に。

:22 弟子たちはだれのことを言われたのか察しかねて、互に顔を見合わせました。

「動揺が広がった」ということもできるかもしれません。マタイはこう記しています。

マタイ26:22「弟子たちは非常に心配して、つぎつぎに「主よ、まさか、わたしではないでしょう」と言い出した。

不安定な弟子たちの心も探られていたのです。

そして、それ以上にユダの心も探っていたことはわかります。

彼は気づいたでしょう。イエスさまはわたしの裏切りに気づいている…と。

イエスさまは裏切る者をご存じでした。そんな中で、言われた言葉は、弟子たちを不安にさせるためではなく、また犯人を特定するためでもなく、また犯人探しをさせるためのものでもありません。

ユダに立ち返るきっかけを与えるためでした。ここでもイエスさまはユダをあきらめていなかったのです。何度も申し上げます。

「…自分の者たちを愛して、彼らを最後まで愛し通された。(：1)」それはユダに対しても真実なことだったのです。

Ⅲ. 最後まで気づきを促されたイエスさま

13:27 この一きれの食物を受けるやいなや、サタンがユダにはいった。そこでイエスは彼に言われた、「しようとしていることを、今すぐするがよい」。

けれどもその場にいる人の誰一人、ユダが裏切る者だとは気づかなかったことが、ここでは記されています。

つまり、それほどユダが裏切り者に見えないほど弟子たちの間で信頼されていたということです。そして、イエス様ご自身もあえて、その裏切り者を人前にさらさなかった…。つまり最後まで悔い改めの機会を与えていたということです。

しかしここでは、その一きれのパンを受け取ったとき、裏切りの自覚を持つユダの心はサタンのものになったことが、「サタンがユダに入った」と表現されています。これまで、イエスさまとの関係をヨハネは、「受け入れるか受け入れないか」という表現で表してきました。

ユダは、自分の過ちを知り、またずっと悔い改めを待っていたイエスさまに背を向けて、サタンをその心に受け入れていったことが、「サタンがユダに入った」とある表現です。

改めて、ユダにわたされた「一切れの食物」それは、キリストの愛のしるしです。
それがイエスさまの心を表します。しかし…

13:30 ユダは一きれの食物を受けると、すぐに出て行った。時は夜であった。
この「夜」が示す「闇」こそが、ユダが選んだ道でした。

さいごに)

ユダはイエス・キリストという光を見ながら、その心は闇にひかれていました。
福音書記者ヨハネは、ユダの裏切りの背景に、はっきりとサタンの存在を示します。
サタンが悪くて、ユダに罪はない…と言っているのではありません。
アダムとエバの時以来、闇へのいざないがわたしたちの周囲にはあるということです。

だから、悪魔に目を張って注意し、注目せよと聖書は言いません。ここを気を付けてください。サタンに、イスカリオテのユダに目を向けることでは、何も解決を得られません

むしろ、イエスさまに目を向けましょう。もっとイエスさまを知ることです。

ヤコブ4:7-8 そういうわけだから、神に従いなさい。そして、悪魔に立ちむかいなさい。そうすれば、彼はあなたがたから逃げ去るであろう。

神に近づきなさい。そうすれば、神はあなたがたに近づいて下さるであろう。

そしてもう一点。ユダはイエスさまの愛を受け入れられなかった。一方でヨハネは、自分の事を繰り返し「主に愛された弟子」と表現して受け取ることができた…この違いに注目です。

自分は愛されているとはっきりと表現する、それこそが彼の強み、彼の信仰だったのです。彼が見ていたイエスさまは、この記述の通りです。

:1 …イエスは、この世を去って父のみもとに行くべき自分の時がきたことを知り、世にいる自分の者たちを愛して、彼らを最後まで愛し通された。

そうしてイエスさまの愛に感動し、あの最初に紹介した聖歌の歌詞にあるように

Load, I want be a christian in my heart. in my heart.

「主よ、わたしは、心からクリスチャンになりたい！ 本物のクリスチャンになりたい！」と言えるのです！